

飼料

◆飼料需要量の推移

平成22年度の飼料自給率は、横ばいで推移

図1 飼料需要量(TDNベース)

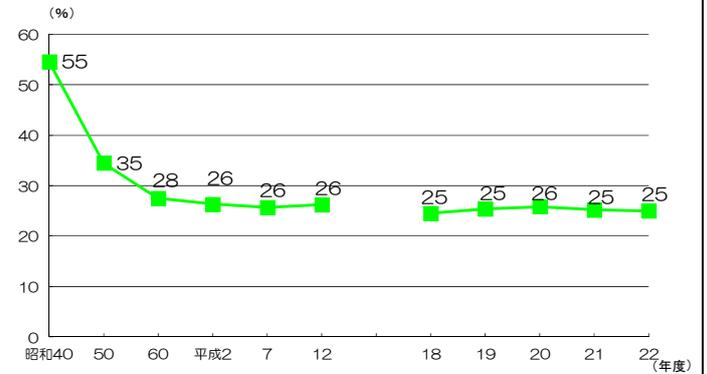


資料：農林水産省生産局畜産部畜産振興課

注：「TDN」：家畜が消化できる養分を数値化した「可消化養分総量」のこと。

飼料の需要量は近年、家畜の飼養頭羽数の減少などを反映して、減少傾向で推移していたが、平成17年度には下げ止まり、わずかに増加傾向に転じた。しかし、22年度(概数)は、前年度と比較して牛や豚の飼養頭数などが減少したことから、前年度を0.7%下回る2545万TDNトンとなった(図1)。

図2 純国内産飼料自給率



資料：農林水産省生産局畜産部畜産振興

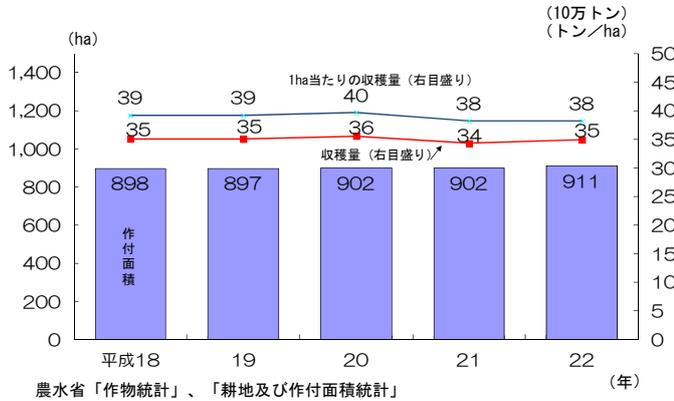
注：濃厚飼料の「純国内産原料」とは、国内産に由来する濃厚飼料(国内産飼料用小麦・大麦等)である。濃厚飼料「輸入原料」には、輸入食料原料から発生した副産物(輸入大豆から搾油した後発生する大豆油かす等)も含む。

飼料の自給率を見ると、22年度(概算)の純国内産飼料自給率[(国産粗飼料+濃厚飼料(純国内産原料)]/総需要量は、前年度並みの25%となった。また、粗飼料自給率、濃厚飼料自給率についても、前年度並みの78%、11%となった。なお、「食料・農業・農村基本計画」における32年度の純国内産飼料自給率目標は38.0%である(図2)。

◆飼料作物の生産

22年の収穫量は、前年を上回る

図3 飼料作物の生産



飼料作物の作付面積は近年、畜産農家戸数の減少に加え、草地(離農跡地)が畜産経営に円滑に継承されなかったなどから、微減傾向で推移していた。しかし、関係者一体となった飼料増産の取組が推進された結果、22年は、91万1千ヘクタール(1.1%)と前年を上回った。

飼料作物の収穫量(TDNベース)は近年、作付面積と単収の伸び悩みから横ばいしないし減少傾向で推移していたが、22年は作付面積の増加から、3,492千トン(1.8%)となった(図3)。

図4 稲発酵粗飼料の作付面積



稲発酵粗飼料の作付面積は、飼料増産行動計画に基づく取り組みの強化などから、年々前年度を大きく上回って推移している。22年度は飼料増産行動計画に基づく取り組みの強化、戸別所得補償モデル対策の開始などにより1万6千ヘクタール(54.7%)となった(図4)。

また、飼料用米の作付面積は平成20年度以降、国際穀物価格の高騰、水田対策による支援の充実などにより急速に拡大しており、22年度は1万5千ヘクタール(260%)となった。

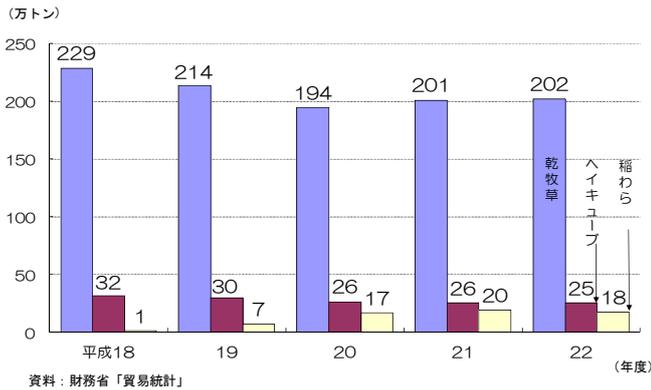


稲発酵粗飼料給与の様子、嗜好性が良く増体向上

◆粗飼料の輸入

22年度の輸入量は、ほぼ前年並み

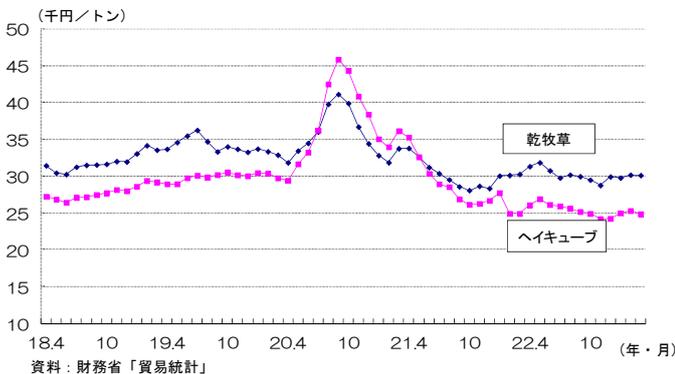
図5 粗飼料の輸入量



粗飼料のうちハイキューブの輸入量(TDNベース)は、15年度以降前年度を下回って推移しており、22年度は、前年度をやや下回る25万3千トン(▲0.9%)と減少した。

乾牧草は18年度以降3年連続で前年度を下回って推移していたが、21年度からは増加に転じ22年度は202万3千トン(0.8%)となった。稲わら(朝鮮半島、中国および台湾から輸入された穀物のわら、もみ)は、20年度は、19年8月に中国産稲わらの輸入停止措置が解除されたこともあり、輸入停止以前の水準にはないものの、前年度を大幅に上回り、21年度においても引き続き前年度を上回った。しかし、22年度は、17万9千トン(▲10.5%)と下回った(図5)。

図6 粗飼料の輸入価格

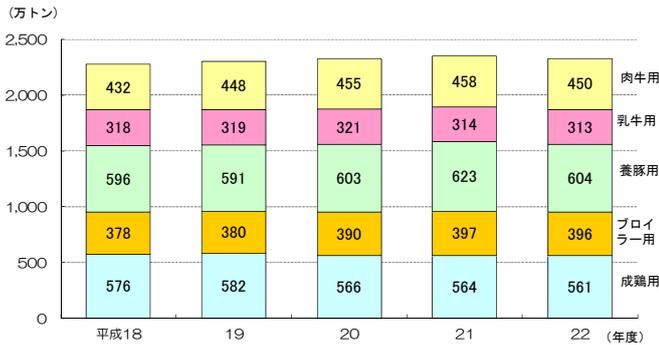


ハイキューブ、乾牧草の輸入価格(CIF)については、20年度は、気候変動に加え、国際的なバイオエタノールの需要の増加に伴うトウモロコシなどへの作付け転換により、生産量が減少したことなどから急激に上昇したが、その後、国際相場や海上運賃が大幅に下落したことなどから急落し、21年度はほぼ高騰前の水準で推移した。22年度は、乾牧草がおおむね前年度を上回って推移したのに対し、ハイキューブはほぼ前年度を下回って推移した(図6)。

◆配合飼料の生産

22年度の生産量は、前年度を1.3%下回る2402万トン

図7 配合飼料の生産量



資料：農林水産省「流通飼料価格等実態調査」

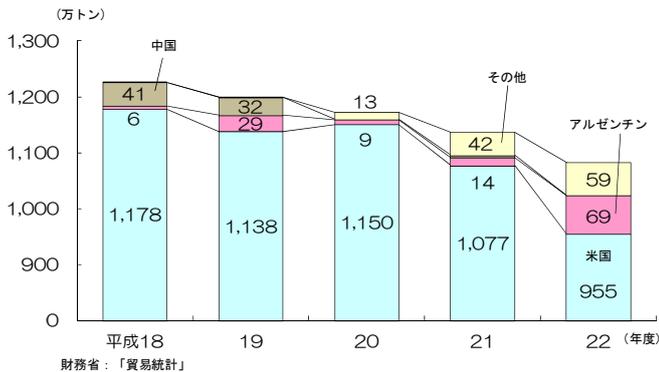
配合飼料の生産量は、近年は2400万トン前後で推移しており、22年度は、前年度を1.3%下回る2402万トンとなった。

畜種別に見ると、養鶏用、養豚用、乳牛用、肉牛用の全ての畜種において、前年度を▲0.4%、▲3.1%、▲0.1%、▲1.9%といずれも前年度を下回った。(図7)。

◆飼料用トウモロコシの輸入

22年度の輸入価格は、前年度を5.2%上回る

図8 飼料用トウモロコシの輸入量



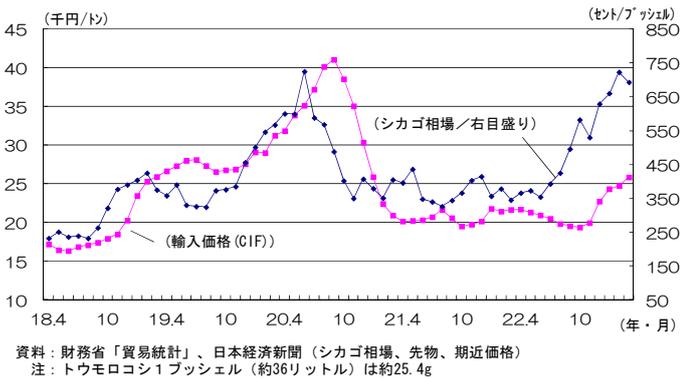
財務省：「貿易統計」

配合飼料の原料穀物(トウモロコシ、こうりゃん、大麦、小麦など)は、そのほとんどを海外に依存しており、トウモロコシは輸入量全体の約7割を占める。

トウモロコシの輸入量は18年度以降、減少傾向で推移しており、22年度は1083万トン(▲6.5%)となった。

22年度の輸入量を国別に見ると、最大の米国産が前年度を11.3%下回る955万トン(▲11.3%)となったのに対し、アルゼンチン産は69万トン(382.1%)と前年度を大きく上まった(図8)。

図9 トウモロコシの価格



トウモロコシの輸入価格は、国際価格（シカゴ相場、期近物）の影響を大きく受ける。

トウモロコシの国際価格（シカゴ定期相場）は、20 年秋以降、同年度上半期の高騰から一転し、バイオエタノール需要の減少や金融危機による投機資金の流出、米国の主産地における豊作、穀物需要の減退懸念などを受け下落した。しかし、22 年度後半以降、ロシアの穀物輸出禁止や米国の在庫率の低下などから再び上昇傾向となった。22 年度の平均では、トン当たり 21,656 円（5.2%）と前年度を上回った（図 9）。

◆ 配合飼料価格

22 年度の配合飼料工場渡価格は、前年度を下回る

表 配合飼料の価格（建値）改定及び補てん状況

（単位：円/トン）

適用期間	価格改定額 （対前期差）	補てん単価		
			通常	異常
18年度 第1四半期	据置	700	700	-
2四半期	▲ 500	-	-	-
3四半期	+ 1,700	1,600	1,600	-
4四半期	+ 5,500	6,500	4,640	1,860
19年度 第1四半期	+ 3,200	8,200	4,371	3,829
2四半期	+ 1,100	7,650	4,553	3,097
3四半期	▲ 400	5,550	5,550	-
4四半期	+ 3,900	7,800	7,800	-
20年度 第1四半期	+ 4,500	10,500	8,983	1,517
2四半期	+ 1,500	7,400	4,002	3,398
3四半期	+ 2,500	7,650	5,252	2,398
4四半期	▲ 12,200	-	-	-
21年度 第1四半期	▲ 4,200	-	-	-
2四半期	+ 2,800	-	-	-
3四半期	▲ 1,400	-	-	-
4四半期	▲ 500	-	-	-
22年度 第1四半期	▲ 1,000	-	-	-
2四半期	据置	-	-	-
3四半期	据置	-	-	-
4四半期	+ 3,200	3,250	3,250	-

資料：農林水産省調べ
注：価格改定額は全農の改定額

配合飼料価格は、飼料穀物の国際相場、海上運賃、為替レートなどの動向を反映する。22 年度の工場渡し価格は、前年度を 0.8% 下回るトン当たり 50,569 円となった。

一方、畜産経営においては、生産費に占める配合飼料費の割合が高い。このため、配合飼料価格の上昇が畜産経営に及ぼす影響を緩和する措置として、昭和 43 年に民間の自主的な積み立てによる通常補てん制度が、昭和 49 年度に

は通常補てんでは対処し得ない異常な価格高騰に対応するために国の支援による異常補てん制度が導入されている。

近年の補てん状況は、通常補てんが 18 年 10～12 月以降 9 期連続して発動し、異常補てんが 19 年 1～3 月期以降 3 期連続および 20 年 4～6 月期以降 3 期連続して発動された。21 年度は飼料価格が低下したため発動されなかったが、22 年度は後半以降価格が再び上昇したため、23 年 1～3 月期に通常補てんが発動された（図 10）。

